

『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムと道徳観の相克

トムとマギーの兄妹愛の描き方からの再考

石井昌子

本発表では、*The Mill on the Floss* (1860)が、George Eliot (1819-80)の小説におけるリアリズムの進展と道徳観の拡大における中間地点に位置することを示した。中間地点とは、『フロス河畔の水車場』は、登場人物の性格を多面的に描いている点で最初の長編小説 *Adam Bede* (1859) よりリアリズムが進展しているが、結末の洪水の場面において作者の道徳的必
要と個人的事情によりリアリズムからの逸脱が見られ、後期作品の *Middlemarch* (1871-72) には及ばないという意味である。エリオットのリアリズムは、読者が登場人物を“[one of] our fellow-men”と感じてこれにシンパシーを抱くことを目的としており (Eliot, “Natural History” 271)、いわば“an instrument of human solidarity”である (Rignall 325)。シンパシーとは、エリオットの書簡によれば、“to imagine and to feel the pains and joys [of others]”である (*Letters* 3: 111; Eliot’s italics)。ところで、シンパシーに欠ける人物の描写はエリオットの道徳観の影響を受けやすいと思われる。そこで作品中のシンパシーに乏しい人物、『アダム・ビード』の Hetty Sorrel、『フロス河畔の水車場』の Tom Tulliver、『ミドルマーチ』の Rosamond Vincy に注目して、エリオットの小説におけるリアリズムの進展と道徳観の拡大について考察した。

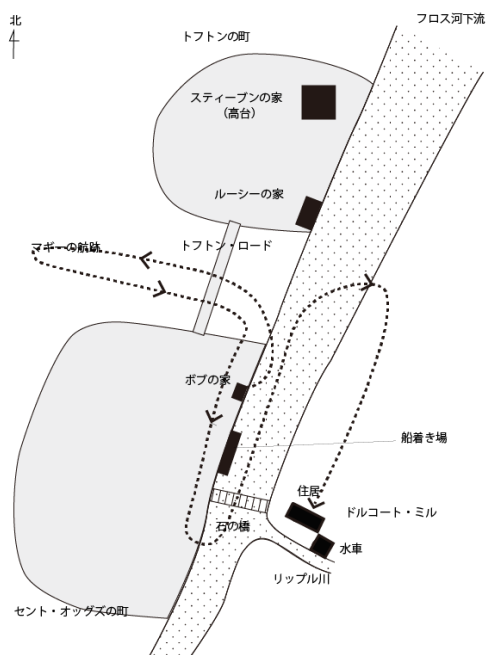
ヘティの性格と心理描写の検討から始める。先行研究が一般に、『アダム・ビード』をリアリズム小説と解していることには疑問がある。なぜなら語り手は、ヘティの利己的な考えは自由間接話法で長々と描写し、ヘティが自分を妊娠させたアーサーに対して感じる憤りや不公平感の間接話法で簡潔に描くなど、語り手のヘティに対する道徳的判断が、ヘティの心理描写より優先されている (136; bk. 1, ch. 15; 137; bk. 1, ch. 15; 346; bk. 5, ch. 37)。また語り手は、ヘティに新たに芽生えたシンパシーや改悛を評価せず、彼女を異分子として憐れみ (349-50; bk. 5, ch. 37)、結局ヘティは流刑により村から追放されるからである。こうしてヘティの性格は一面的に描かれている (Cf 石井)。

『ミドルマーチ』に関しては、発表当初から、その人物や状況が“the products of observations”というよりは“her moral consciousness”から生まれたものである (James 498) とみなす批評が主流であったが、20世紀半ば以後はリアリズム小説の傑作と考えられている。ところで先行研究は一般に、ロザモンドとの結婚は夫 Lydgate にとって災いだと考えている。ロザモンドは夫の外科医の仕事と科学実験を嫌悪し、夫の借金による家計縮小にも協力せず、夫の意図に反する策を次々に講じる。確かにリドゲイトは結婚相手の選択を誤った。しかし他方、ロザモンドの利己主義を擁護するテキストの記述及び時代背景がある。例えば当時の女性の教育、妻に財産権が原則ないことなどである。またリドゲイトの目指す医学上の大発見は、彼の手法からも当時の医学および生物学の状況からも、ロザモンドと結婚するか否か

にかかわらず不可能であった (*Middlemarch*, 139; bk. 2, ch. 15; 415; bk. 5, ch. 45; 426-27; bk. 5, ch. 45; Beer 154; Rothfield 97)。彼の研究が必ず挫折するのであれば、もし彼がドロシアのようにシンパセティックで自己犠牲を厭わない女性と結婚していれば、誇り高く愛情深いリドゲイトは、妻にかけた苦勞のせいでロザモンドとの結婚以上に苦しんだと思われる。ロザモンドの描き方は実に多面的である。

『フロス河畔の水車場』のリアリズムに関する先行研究で最も議論を呼んだのは、物語の最後に発生する洪水の蓋然性と芸術性である。しかし意外にも、トムとマギーの行動の蓋然性は疑われたことがない。本発表はこれを疑い、その背景に作者の道徳観と個人的事情を読み取る。まず、マギーが一人ボートを漕いでトムのいる水車場に行き着く蓋然性は低い。フロス河は、マギーがボートを漕ぎ入れた時には引き潮で、その濁流は石の橋を破壊し、船着き場の木造機械をいくつかの塊に破壊して押し流す勢いである。ましてマギーのように立って漕いでいけば、たちまちバランスを崩して転覆する蓋然性が高い (540; bk. 7, ch. 5)。このような超人的な行動が可能かどうか大いに疑問である。次に、トムがマギーのボートに乗り込んで屋外の危険を悟った後に取った行動にも疑問がある。マギーが水車場に無事に辿り着けたことを、トムはほとんど奇跡と感じ、自分のマギーへの冷たい仕打ちを恥じて目を潤ませる (541; bk. 7, ch. 5)。トムは責任感が強い人間である。その彼

が、命がけで自分を救いに来たマギーをさらなる危険に晒すことは考えにくい。マギーを勘当した時も、入用な物は与えると言っている (504; bk. 7, ch. 1)。しかも、二人はルーシーに会いに行くのだが、ルーシーは避難して無事であると予測している (541; bk. 7, ch. 5)。トムの取る一番蓋然性の高い行動は、二人で自宅に引き返すことである。



ではなぜ蓋然性の低いプロットを使ったのか？ 一つには作者のシンパシーを重んじる道徳観がある。それは、沈没したボートがやがて、金色の日光に輝く河面に黒い点となって現れることから分かる (542; bk. 7, ch. 5)。金色の日光は、エリオットの小説や旅行記においてはシンパシーと天国を象徴する (e. g., “Ilfracombe, 1856” 272)。トムは自分を助けに来たマギーを見て、自分への忠誠心を悟り、彼女に対して失っていたシンパシーを取り戻したのである。さらに作者の個人的な事情もある。『フロス河畔の水車場』は、エリオットの最も自伝的色彩の濃い作品と見なされている。エリオットは妻子のある George Henry Lewes と内縁関係に入ったため、兄 Isaac Evans に勤当され、ヴィクトリア朝社会からも排斥された。仲の良かった姉の Christiana は、エリオットとの文通をアイザックに禁じられ、エリオットに会えないまま結核で亡くなった。エリオットは兄を改悛させる必要を強く感じていたに違いない。マギーは何としてもボートで水車場に辿り着かねばならず、和解を永遠にするため、トムはマギーとともに死なねばならなかったのである (上記マギーがボートでトムを助けに行く航行図は、テキストの記述に基づいて筆者が作成した)。

次に『フロス河畔の水車場』のリアリズムが、性格描写の多面性において『アダム・ビード』より進展していることについて述べる。先行研究は一般に、トムは生涯利己的・専制的で変わらないと考えている。先行研究にフェミニズム批評が多いので、物語中のジェンダーと関連する語、“masculinity”と“manliness”を切り口として、トムがどのように描かれているかを調べた。“masculinity”には辞書の意味に加えて男性優位思想が含まれている。19世紀のイングランドにおいては、生物学的に女性の脳は男性より小さく働きが劣っていると考えられ (Showalter 64; Tosh 68-69)、社会的にも“hegemonic masculinity”の時代であった (Connell 186-99; Tosh 63-68)。トムが男性優位思想に染まっている様子は、彼の先生が、女子は理解は早いですが深くは学べないと言うのを聞いてトムが喜び (158-59; bk. 2, ch. 1)、父親の借金返済のために働いているトムがマギーに、父親の敵の弁護士の息子 Philip との交際を禁じる時、“Then, if you can do nothing [in the world], submit to those that can.” (361; bk. 5, ch. 5) と言うことなどに現れている。他方“manliness”は“masculinity”に加えて、肉体的・精神的タフさ (決断力、勇気、忍耐力) (Tosh 87) と弱者に対するシンパシーを意味する (Gilmour 69-70)。トムの性格が“manly”として肯定的に捉えられている場面には、例えば父親が破産した時に家族への忠誠を示す場面がある (225; bk. 3, ch. 3)。しかしトムの性格に優しさ (シンパシー) があることを何より示すのは、牧師館で学んでいた頃、牧師の幼い娘ローラの散歩を習慣として命ぜられて嫌がらなかったことである。ローラが歩くのは稀で、実際にはトムは重いローラを抱いて庭を何周も歩く必要があった。このトムの弱者に対する優しさを、エリオットは語り手を通じて“true manliness”と呼んでいる (151; bk. 2, ch. 1)。ところが、父親の破産を機にトムの性格に変化が生じる。トムは、返済不能という当時の考え方では“a sort of moral pillory” (290; bk. 4, ch. 2) に等しい不名誉からの脱却に邁進し、世論に迎合するようになる。マギーがスティーブンと一泊して帰ってきた時にトムが彼女を勘当する場面でも、トムは“the world shall know that I feel the difference between right and wrong.” (504; bk. 7, ch. 1; Eliot’s italics) と言い、世論を判断基準としている。こうしてトムは弱い人間に対する“manliness” (sympathy) を喪失してゆく。トムの性格はその変貌の過程も含めて多面的に描かれている。

『フロス河畔の水車場』は、人物の多面的性格を描くという点において、そのリアリズムが『アダム・ビード』より優れているが、物語の最後でリアリズムから逸脱する。しかし、後の『ミドルマーチ』における、多面的に描かれた多くの人びとの運命が「網」のように関連した壮大なリアリズムへと発展していく礎となっているのである。(なお、発表では言及しなかったが、中期作品 *Romola* (1863) と *Felix Holt—The Radical* (1866) のシンパシーに欠ける登場人物の描き方は、再び一面的な人物描写へと後退する。)

引用文献

- Beer, Gillian. *Darwin’s Plots*. Cambridge UP, 2009.
- James, Henry. “Review,” *Atlantic Monthly* (May 1885). *George Eliot: The Critical Heritage*, edited by David Carroll, Routledge, 1971, pp. 490-504.
- Connell, R. W. *Masculinities*. U of California P, 2005.
- Eliot, George. *Adam Bede*, edited by Carol A. Martin. Oxford UP, 2008.
- . “Ilfracombe, 1856.” *The Journals of George Eliot*, edited by Margaret Harris and Judith Johnston, Cambridge UP, 1998, pp. 262-75.
- . *The George Eliot Letters*, 9 vols, edited by Gordon S. Haight. Yale UP, 1954-1978.
- . *Middlemarch: A Study of Provincial Life*. Edited by David Carroll. Oxford UP, 2019.
- . *Mill on the Floss*. Edited by A. S. Byatt. Penguin, 2003.
- . “The Natural History of German Life.” *Essays of George Eliot*, edited by Thomas Pinney, Columbia UP, 1963, pp. 266-99.
- Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. Allen & Unwin, 1981.
- 石井昌子. 「語り手の心の鏡に映らないヘティ——『アダム・ビード』のリアリズム再考」. 『ジョージ・エリオット研究』, 第 24 号, 2022, pp. 65-81.
- Rignall, John. “Realism.” *Oxford Reader’s Companion to George Eliot*, edited by John Rignall, Oxford UP, 2000, pp. 324-26.
- Rothfield, Lawrence. *Vital Signs: Medical Realism in Nineteenth-Century Fiction*. Princeton UP, 1994.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Writers, from Charlotte Brontë to Doris Lessing*. Revised and expanded ed., Virago, 2009.
- Tosh, John. *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain: Essays on Gender, Family and Empire*. Pearson Longman, 2005.